

新入生のボランティア意識とセンターの課題

－「2016年度 新入生ボランティア活動アンケート」

1. 調査の概要と結論

ボランティアセンターでは、2000年度より、新入生のボランティアへの意識や活動の意向を把握することを目的に、毎年4月の新入生学科ガイダンス時にボランティア活動に関するアンケート調査を実施している。2016年度調査では、回収率は97.1%と高く、2,956人中2,870人の新入生から回答が得られた。回答者数の学科別割合はほぼ定員を反映しており、性別では男性が37.4%、女性が62.5%と女性が多かった。性別によるクロス集計結果から、女性の方がボランティア経験（女性44.1%、男性32.9%）・大学におけるボランティア参加希望（女性82.4%、男性63.1%）ともに高いことが示されており、このことが本調査結果全体に影響していると考えられる。

大学時代にボランティア活動を通して学ぶことに「大いに興味がある」「興味がある」と回答した学生は、全体の昨年と全く同様の64.5%であり、「興味があまりない」「全くない」と回答した学生（8.0%）を大きく上回っている。この傾向は、ボランティア活動希望者数についても同様であり、前年度までの調査とほぼ同じ75.2%、2,158人の学生が何らかのボランティア活動への参加を希望している。また、ボランティア活動への導入の機能を担う「1 Day for Others」への参加希望者（1,139人：39.7%、前年度1,060人：37.6%）は増加傾向にあり、「状況を確認してから参加する」を合わせると、参加を検討している新入生は全体の90%を超える2,607人に達している。しかし、ボランティアセンターの現行の「1 Day for Others」実施体制ではボランティア受入機関やリーダー学生数の不足などさまざまな要因により、このニーズに応えることは困難である。入学時のボランティアに対する期待を損なわず、新入生をスムーズにその後のボランティア活動に導入するためには、「1 Day for Others」の実施システム・方法の再検討をおこなうにとどまらず、その概念／機能についても改めて検討し、何らかの抜本的な変革をおこなう必要があると考えられる。

今年度から加えられた項目である「明治学院大学 教育連携・ボランティア・サティフィケイト・プログラム」への参加希望に関しては、「参加する」と答えた学生は69人（2.4%）にとどまり、「可能なら参加してみたい」（687人：23.9%）を合わせても、26.3%と、「1 Day for Others」（39.7%）と比較して少数であった。しかし、「情報を確認してから参加を考える」は、1,803人（62.8%）と多く、これを加えると89.1%と「1 Day for Others」とほぼ同様の9割近くの学生が関心を示している。本プログラムは、ボランティア活動と正課教育を有機的に関連付け、本学の教育理念“Do for Others”を具現化するための大変重要な取り組みである。今後プログラムが定着するまでの数年間、丁寧な情報提供と説明をおこなっていくことが必要と考えられる。

ボランティア活動に参加したい理由については、ボランティア活動を通じた何らかの「学び」を得たい、すなわち新たな出会いや経験（53.5%）、ものの見方や考え方（41.1%）、知識（37.2%）などを得たいという理由が高い割合を占めている。これらの学びを得るためには、単にボランティア活動をおこなうだけではなく、地域のニーズを考え活動を企画し、活動の意味を振り返り、その後の展開を創り出すなど、ボランティア活動前後の営みが意味を持つと考えられる。ボランティアコーディネーターなどによる個別・集団への関わりなどをはじめとしたさまざまな面からの活動支援が求められよう。

一方、参加したくない理由として、「関心がない」（35.6%）、「時間がない」（35.0%）、「きっかけがな

い」(18.6%)が多く挙げられた。青年期には、新たなものに対して自らが積極的な関心と知的好奇心を持って関わっていくという態度を培うことも大切な課題である。「関心がない」については、興味に応じた内容の工夫が、「時間がない」「きっかけがない」については、敷居の低い活動形態や内容の工夫に加え、ボランティアセンターを開かれた場所に配置し、気軽に立ち寄れるようにするなどの工夫により、周囲の人々や社会、環境に対して能動的積極的に興味を持ち関わっていこうとする態度の醸成を目指すことが必要と考えられる。

学科別集計からは、芸術学科における演劇、教育発達学科における子ども支援など、学科の特性に応じた分野への興味が示された。新入生はボランティア活動に対して、課外活動としての学びのみならず、「明治学院大学 教育連携・ボランティア・サティフィケイト・プログラム」で目指す正課教育と関連した学びを期待しているといえよう。

2. 調査結果

(1) 大学入学前のボランティア活動参加

大学入学前のボランティア活動参加の有無については、参加有りが40.0%（前年度44.2%）、参加なしが59.8%（前年度55.7%）であった。活動分野では、調査開始から前年度までと変わり、子ども（21.0%）、社会福祉（20.7%）が環境（18.6%）を上回り、まちづくり（13.6%）を合わせた4分野で全体の約4分の3を占めていた。

(2) 大学におけるボランティア活動に関する希望

大学におけるボランティア活動への参加希望者数は2,158人（75.2%）で、前年2015年度調査結果（75.5%）とほぼ変わらなかった。参加したい理由としては、第1位が「新しい出会いや経験を得たい」（53.5%）、第2位が「ものの見方や考え方を広めたい」（41.1%）、第3位が「知識を広げたい」（37.2%）、第4位が「地域や人のために役立ちたい」（33.2%）、第5位が「授業では得られないものを学びたい」（32.8%）であり、前年度とほぼ同じ傾向を示した。内容別集計では、男性が特徴的に「スポーツ」の指導、サポートへの興味を示した。

参加したくない理由は、多い順に「関心がない」（35.6%）、「時間がない」（35.0%）、「きっかけがない」（18.6%）となっており、「人間関係がうまく作れない」（2.0%）、「これまでの体験から嫌になった」（0.7%）などの明確な理由があるものは少なかった。

(3) ボランティア活動の認知度

入学前に本学のボランティア活動を「知っていた」回答者数は1,560人（54.4%）で、前年度比で初めてわずかに減少し、横ばい傾向を示した（2013年度42.5%、2014年度50.1%、2015年度54.8%）。本学ボランティア活動に関する情報入手は「大学ホームページ」が60.6%と突出して高く、「オープンキャンパス」（31.5%）と合わせて9割を超えており、テレビや新聞などのメディア、家族や知人などの口コミと比較して大学が主体となった広報の効果が高いことが示されている。

(4) 関心分野

関心のあるボランティア活動分野は、「国際」（14.9%）が最も高く、次いで、「まちづくり」（11.6%）、「子ども」（10.8%）、「環境」（10.7%）、「文化」（10.7%）となっており、ほぼ例年と同じ傾向であった。

「被災地支援」は7.6%と前年度(6.7%)の減少傾向から一転増加した。災害に対する支援は息の長い活動が必要とされる。本学ボランティアセンターによる東日本大震災に対する被災地支援活動「Do for Smile@東日本」プロジェクトは、震災後6年目を迎え、これまでの支援・活動を振り返り、現地のニーズを擦り合わせ、今後の方向性を積極的に検討しているところである。新入生の関心の高まりを生かした展開を試みたい。

学科別集計では、「国際」分野には英文・国際経営・国際・国際キャリア学科生が、「社会福祉」分野には社会福祉学科生が、「子ども」分野には教育発達学科生が、「文化」分野には芸術学科生と、学科の学びと関連した興味を示されていた。これらの学科教育との連携が求められる。

(5) 「1 Day for Others」への参加希望

「1 Day for Others」への参加希望では、「参加する」(189人：6.6%)、「可能なら参加したい」(950人：33.1%)、「状況を確認してから参加する」(1,468人：51.1%)と参加を検討している学生の割合は90.8%であった。

(6) 「明治学院大学 教育連携・ボランティア・サティフィケート・プログラム」への参加希望

今年度から開始した「明治学院大学 教育連携・ボランティア・サティフィケート・プログラム」への参加希望では、「参加する」は69人(2.4%)にとどまり、「可能なら参加してみたい」は687人(23.9%)、「情報を確認してから参加を考える」は1,803人(62.8%)、「参加しない」は269人(9.4%)であった。

(ボランティアセンター長補佐 杉山恵理子)